

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：24505

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792734

研究課題名(和文)施設利用をする高齢者の家族が介護を継続する中で抱く思いに関する研究

研究課題名(英文) Study on Feelings of Families Who Continue to Care for Their Elderly Using Nursing Care Facility

研究代表者

清水 昌美(MASAMI, SHIMIZU)

神戸市看護大学・看護学部・助教

研究者番号：30404891

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円、(間接経費) 210,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、施設利用をする高齢者の家族が、施設での介護を継続する中で抱く思いを探究する目的で、75歳以上の家族介護者かつ配偶者に半構成的面接を行い、質的記述的分析を行った。配偶者らは、自分の力ではどうにもならない状況において施設利用を選択していたが、介護継続は家族として当たり前のことと認識し、自身の生活に組み込んでいた。また、介護継続において自分の健康を維持することに価値を置いていた。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted for the purpose of examining feelings that the families of elderly persons using nursing care facilities go through while they continue to care for their elderly in the facilities. We conducted semi-structured interview on the family members and spouses of the elderly of age 75 or over, and then carried out a qualitative, descriptive analysis. The spouses and others have chosen to use the facility services in handling a situation that was beyond their control capacity, but they recognize the continuation of nursing care as an obligatory duty of the family and therefore have incorporated that duty in their own routine. They also have made it a point to maintain their own health as they continue giving the nursing care.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：家族介護者 施設介護 高齢者看護

1. 研究開始当初の背景

高齢者介護は可能な限り在宅で暮らすことを目指しているが、さまざまな事情から介護保険施設への入居を選択する要介護高齢者は少なくない。要介護高齢者の施設への入居によって、介護の担い手の中心は施設の介護専門職の手に委ねられるが、家族の役割や責任は消失するのではなく、施設入居者の家族のうち入居後も面会を実施している人は、面会の中で「施設家族介護」を行っていることが示唆されている(深堀, 2008)。

在宅介護を担ってきた介護者の視点から、介護老人福祉施設のケアに対する家族の要望とその提示プロセスに着目した研究によると、家族は施設への要望を取り上げてもらえるかどうかを押し量り、多くの要望を施設に伝えることをあきらめていたことが報告されている(浅川, 2009)。また、介護の場が在宅から施設に移ることで、家族は、要介護者のケア方針決定の主導権を奪われたり、これまで自宅で介護をつづけてきた生活の継続性が断たれる経験をしていた(浅川, 2009; 鈴木, 2008)。

先行研究には、施設介護を継続する家族の思いについて、要介護者との関係性や介護に対する価値観などを含めた視点から捉えられたものは見当たらず、施設における家族支援のあり方が十分に検討されているとは言い難い現状にある。高齢化に伴い施設で最期の時を過ごす高齢者も増えてくるころが予測され、施設ケアスタッフと家族との関係性のあり方や支援のあり方も、より重要性を増してくると考える。また、施設利用をする高齢者の介護を継続する家族の思いを知ることが、これまでの施設ケアを見直し、入居者と家族が関係性を維持しながら各々の生活を安心して過ごせるような家族支援のありかたについて、重要な示唆を与えるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、施設利用をする高齢者の家族の思いについて、以下の視点から探求する。

(1) 家族介護者は、要介護となった高齢者が施設入居するまでに、要介護者とどのような関係性を築き、どのような介護を行ってきたのだろうか。

(2) 介護継続をしている要介護高齢者が施設入居に至ったきっかけはどのようなことだろうか。その背景には、家族介護者のどのような思いがあったのだろうか。

(3) 家族介護者は、施設で介護を続けるなかで、どのような思いを抱き、今をどのように捉えているのだろうか。また、自分自身の今後の生活をどのように思い描いているのだろうか。

3. 研究の方法

(1) 研究参加者

以下の条件を満たす人とした。

施設利用者への面会を継続している 75 歳以上の家族介護者かつ配偶者

言語的なコミュニケーションが可能で、心身ともに安定した状態であること

研究計画初期段階では、65 歳以上の家族介護者としていたが、研究協力施設の看護責任者らとのディスカッションでは、娘や息子の立場と配偶者の立場では、その関係性や相手への思いが異なること、また、前期高齢者と後期高齢者とは、介護者の心身の状況も異なることが予測されるとの意見が出された。その後、対象を 65 歳から 75 歳に、家族介護者は配偶者に変更して、対象選定を依頼した。面会の継続については、少なくとも 2 週間に 1 回は施設に面会に来られていることを条件としたが、依頼時には面会頻度の多い人を優先的に選んでもらうようにした。

(2) データ産出方法

作成したインタビューガイドに沿って、半構成的インタビューを行った。インタビュー時間は 1 回 60 分程度とし、1 人の参加者に 2 ~ 3 回程度行った。インタビューは了解を得て録音した。

(3) データ分析方法

インタビューで得た内容を逐語化し、逐語録を繰り返し読み、介護を継続している研究参加者の思いに関係する語りを一つの話題として抽出した。その後、事例ごとに関連する話題同士をまとめ、本人の言葉を交えながらストーリーを構成し、研究参加者が介護を継続する上で抱く思いについて解釈を行った。さらに、事例同士の共通点に着目して分析し、中心となるテーマを導き出した。

(4) 倫理的配慮

研究参加者に研究目的、方法、参加は自由意思に基づくものであること、データは匿名性を確保し本研究以外の目的には使用しないことなどを文書および口頭で説明し、同意書に署名を得た。本研究は、神戸市看護大学倫理委員会の承認を得て実施した(受付番号 2011-1-14)。

4. 研究成果

(1) 研究参加者の概要

本研究の参加者は 3 名であり、性別は男性が 1 名(A 氏)、女性が 2 名(B 氏, C 氏)であった。年齢は 70 歳台が 2 名、80 歳台が 1 名であった。インタビュー回数は参加者各々に 2 ~ 3 回実施し、インタビュー時間は 120 分 ~ 330 分であった。

(2) 施設利用をする高齢者の家族が介護を継続する中で抱く思い

研究参加者らが介護を継続する中で抱く思いについて、3 名に共通する内容は以下の通りであった。

施設利用の背後にある思い

A 氏の妻は、くも膜下出血を機に要介護状態となり、急性期病院での保存的治療とリハビリテーション後、介護老人保健施設の利用に至った。B 氏の夫は脳梗塞を 3 度繰り返し、

その都度治療とリハビリ後に妻が自宅で10年以上にわたる介護を行っていたが、自宅での介護に限界を感じていたころ、夫が肺炎で入院し施設利用に至った。C氏の夫は脳出血を発症し、保存的治療とリハビリ後にデイサービスを利用しながら妻が自宅で10年以上にわたる介護を行っていたが、夫のADL低下に比し、自身の腰痛悪化などから介護継続が困難となり施設利用に至った。

それぞれの施設利用の経緯は異なるが、【自分だけではどうにもならない状況】であるとの認識から施設利用に至っていた。また、3名とも比較的近隣に娘や息子が住んでいたが、【子らに頼るわけにはいかない】という思いをもっていた。

施設を利用する配偶者への思いと介護行動

参加者らは、施設に入居している配偶者の性格や好みを考え、施設に好物を持ち寄り食事介助、リハビリ、入浴介助などを行っていた。A氏は毎日、B氏は週に3日程度、C氏は週に3~4日程度という頻度で施設に足を運んでおり、【施設に通うことを自分の生活の中に組み込む】ようにして介護継続を行っていた。また、そのような生活が特別なことではなく、【家族として当たり前の役割を果たす】という認識を持っていた。

施設スタッフへの思い

参加者らは生活援助に携わる【施設職員の仕事は本来自分が担う仕事】と認識し、自分に変わって行ってくれるスタッフにはお世話になっているという思いを持っていた。自分ができないことをお願いしているという認識から、【無理な要求をすべきではない】と考える傾向がみられた。

自分自身に対して抱いている思い

介護を継続してきた参加者らは、施設利用をする高齢者が心身の健康を維持できるように働きかける一方で、【自分の健康を維持する】ことに価値を置いていた。A氏は健康維持のために30分以上歩いて施設に通うことを日課とし、C氏は日々体操を行うことを日課としていた。健康の限界を感じるまで自宅介護を続けてきたB氏は、一人で頑張り続けてきた過去を振り返り、さまざまな人に頼りながら自分の健康を維持していくことが大切と考えを改めていた。こうした価値観を抱く背景には、入居している配偶者にとって【頼れるのは自分だけ】という思いがあった。また、配偶者だけでなく【他者の役に立ちたい】という思いを抱いていた。

今後に対する思い

参加者らは今後の望みや自分の人生の終末に対する思いを具体性をもって語ることはなく、理想を思い描くというより「なるようにしかならない」と【成り行きに身を任せる】傾向がみられた。

(3) 研究参加者の抱く思いの特徴と本テーマにおける新たな知見

先行研究において、家族は高齢者が施設に

入居することによって、施設への要望をあきらめたり、自宅での生活の継続性が断たれる経験をしていたとの報告(浅川,2009;鈴木,2008)があるが、本研究の参加者らは「本来なら自分が担うべきこと」「お世話になっている」という思いが先に立ち、要望をあきらめるといよりもむしろ【無理な要求をすべきではない】と考える傾向があった。また、配偶者と生活する場が離れても、【施設に通うことを自分の生活に組み込む】ことで、これまで築いてきた関係性を保ちながら介護を継続していた。そこには先行研究にみられるような施設入所への抵抗感は全面に出されず、【成り行きにまかせる】という方法で、現状とうまく折り合いをつけようとしている姿が窺えた。【成り行きにまかせる】という態度には、【自分ではどうにもならない状況】という認識が関係していると考えられた。このような特徴は、本研究の研究対象者が75歳以上の配偶者であること関係していると考えられた。

本研究において、参加者らは【自分自身の健康を維持する】ことに価値を置き、行動していること、その背景には他に家族(息子や娘)がいても【頼れるのは自分だけ】という思いがあることが明らかとなった。このような家族介護者の健康意識や健康行動が明らかになったことは、本テーマにおける新たな知見と考える。また、施設職員に配偶者のケアを委ねざるを得ない状況においても、【他者の役に立ちたい】という思いがあることが見いだされたことも、本研究における成果と考える。

(4) 看護実践への示唆

本研究の参加者らは施設職員らに【無理な要求をすべきではない】と考える傾向があった。このような傾向は、本研究の参加者らのように配偶者を思いやり、介護に対する責任感を持つ人ほど強と考えられる。看護者には、家族介護者が介護に望むことを表出できるような環境づくりが求められる。また、介護を継続する配偶者も健康上の問題を抱えている可能性があることを念頭におき、健康を維持していく方法を共に考えていく必要がある。

一方で、参加者らは【自分だけではどうにもならない状況】に逆らうことなく今ある環境の中で生活を再構築し、さらに【他者の役に立ちたい】という思いを抱くに至っていた。このことから、さまざまな危機を乗り越えてきた高齢者の持つ力に気づき、活かせるような関りの必要性が示唆された。

(5) 今後の課題

本研究は、施設利用をする高齢者の配偶者の抱く思いについて、共通性を中心に分析・考察したが、自宅での介護経験の有無や性別による違いなどを考慮した支援のあり方について、さらに事例を蓄積し検討していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

清水昌美,施設を利用する妻への面会を続ける A 氏が介護を継続しながら抱く思い,日本老年看護学会第18回学術集会,2013年6月,大阪.

6. 研究組織

(1)研究代表者

清水昌美 (MASAMI SHIMIZU)

神戸市看護大学・助教

研究者番号：30404891